

ティマイオスの宇宙論

Cosmology in Timaios

長 瀬 米 蔵

Yonezō Nagase

は じ め に

ルネッサンスの画家ラファエロ (1483~1520) 作の「アテナイの学堂」において、プラトンが手にしているのは、自らの著「ティマイオス」であって、アリストテレスはそれに対して、「ニコマコス倫理学」を手にしている。そして前者は天を指さし、後者は地を指して描かれている。このことはまさしく両者の思考の方式の相異を象徴しているものである。プラトンはその「ティマイオス」のなかで、この宇宙がどのようにしてできたものであるかについて物語るのである。いわば彼の宇宙生成論を展開しているといつてよい。その宇宙は誰によって、何を手本にしてつくられたものであるか、プラトンの奉持する「イデア」との係わりはどうか、などきわめて基本的問題と無縁ではあり得ない。ソクラテスに著作が存しなかった理由として、アテナイがその歴史の極盛期に際して、その散文文学をもたなかったことがあげられている。ソクラテス自身は何もあらわさなかったこと、彼の生涯の終り近くまでアテナイには散文を書いた人はぜんぜんなかったということにがくぜんとするのである。そのような時に、プラトンが自らの偉大なる師によって深厚な印象を受けとめていたこと、そして彼の主なる努力は、その印象を、ソクラテスのことを知らない人たちに生かそうとすることにあつたことであり、これは新奇なこととされたのみならず、ソクラテスの記憶を生かす目的のために彼の採用した対話の形式もまた新奇なものであつたとされている。しかもプラトンはそのころ偉大なる戯曲的天才であつたのであり、さらにさいわいなことに、彼にとってその師の記憶を保存することがもっともやりがいのある仕事であると考えられていたことで、もしこの記憶を彼が保存しなかったならば消滅してしまつたことであろうことはうたがいない。それに加えて、東西イオニアの哲学が綜合されたのは、アテナイにおいてこそ、しかもソクラテスの手においてこそなされたと知られるとき、正に間一髪、魂の凍る思いを禁じ得ないのである。

なおこの対話篇は古来プラトンの全著作の中でも独特の位置を与えられていたという。それはこの対話篇が難解であつて、プラトン創設の「アカデメイア」の第一代からして、その解釈について論争が行われたこと、さらにこの対話篇が宇宙論と自然学とをとり扱っていること、また第十三世紀にアリストテレスの「形而上学」ならびに「自然学」の稿本が発見されるまでは、この対話篇の前半の三分の二が、ラテン語訳を通してヨーロッパの学界にもっとも親しまれてきたことによるという。

「ティマイオス」の構成

この対話篇は三部分からなっている。すなわち、①ソクラテスが「国家篇」1～5巻までのあらましをのべて、望ましい国家の具体的実現を要望している部分、②古アテナイがアトランティスを攻撃した物語、③ティマイオスの広義の自然学説である。

①ソクラテスの要望はしかしながら「静止している……描かれた美しい生物」の感があり、「この生物の動くのを見たいという願望が秘められている」のであろうと、政治の実際経験を得た晩年のプラトンはうけとめているふしがあるとする研究がある。すなわち「静止した美しい生物」のような国家はきわめて現実性にとぼしく、「動くもの」すなわち現実性のあるものによって置き換えられる必要があると感じていたのではないかというのである。このような意図が「ティマイオス」や「法律」にもはたらいているという。また「動くもの」は「ティマイオス」において「生成」を意味し、生成には原因がなくてはならないのであるから、「動くのを見たい」というソクラテスの要望には、すでに世界生成の過程とその原因とを扱うこの対話篇のテーマが見通されていたのではないかというのである。

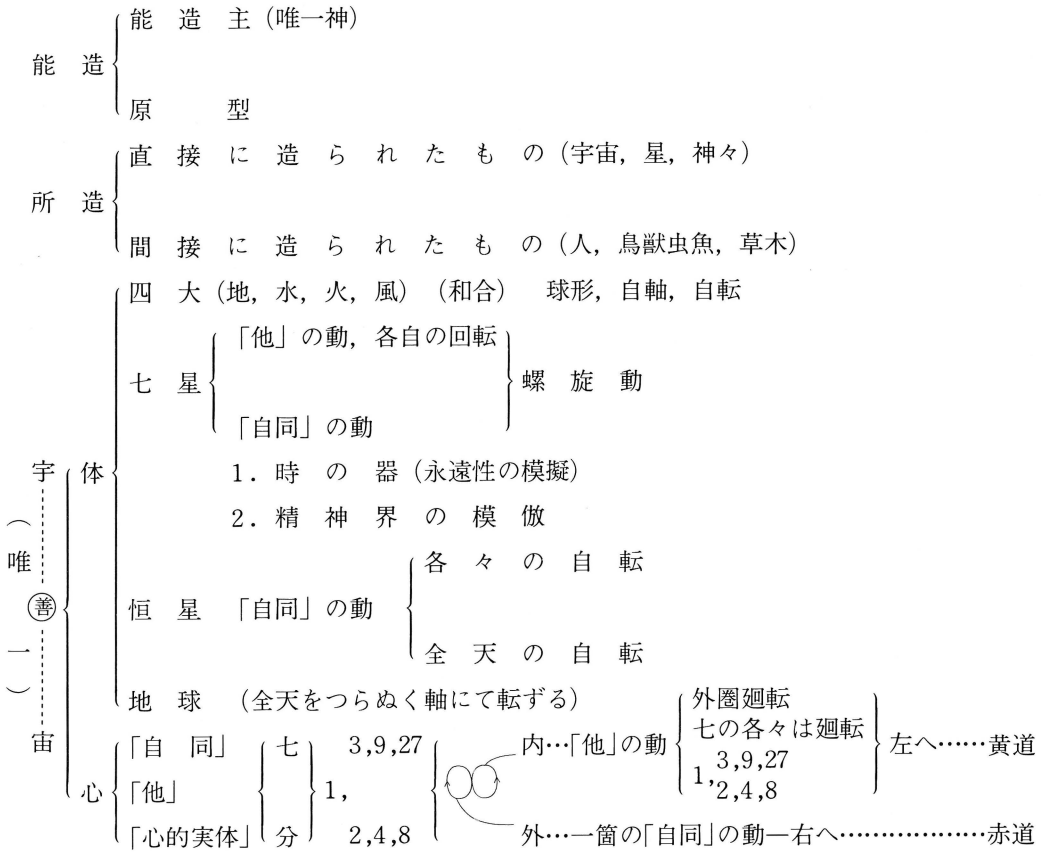
②これは「ティマイオス」の登場人物の一人であるクリティアスによってのべられている。七賢人の一人ソロンがナイル河の河口デルタに旅行し、その祭司からきいたものとして語られている。このソロンの時代よりおよそ九千年以前に、アテナイはすでに法律を有し輝かしい事業を成就していた。この時代のアテナイの制度はすこぶるエジプトのそれと類似し、各階級が整然と区別され、その法律は、精神的方面でも、宇宙の観察をはじめ、占星術や医術の法則を見出し、それらに関わる知識の開発に注意をはらっていた。これらの制度や組織は「戦争を愛し智慧を愛する女神」すなわち「アテネ」が与えたものであった。ところでその当時ジブラルタル海峡の外に、アトランティスという島があり、そこに興った強大な主権が、イタリヤにおよぶヨーロッパ、エジプトにいたるアフリカを制圧して、さらにアテナイに攻めよせたことがあった。この時アテナイはすべてのヘラス人を糾合してこれに当り、後には単独孤立をもってこの侵入者を防ぎ勝利を博したという。しかしその後起った大地震と洪水により、一夜のうちにアテナイの勇士も地にのまれ、アトランティスも海に没し去ったという話である。これは「ティマイオス」のテーマとは直接の関連はないといわれている。

③この部分は「ティマイオス」の主要部をなし、かつ大半を占める宇宙論、自然学の部分であって、ほとんどティマイオスひとりによって語られている。その内容は、天文学から生理学さらに病理学にまでわたり、今日自然科学といわれる学問のおよそ全域にかかわっている。ここでは、「常に存在して決して生成しないものは何か」、「常に生成して決して存在しないものは何か」、「生成の原因は何か」、などが問題であり、叡智の対象であるところの永遠なる自同的存在、臆見の対象である生成者、その必然的原因などが問われている。

「ティマイオス」の宇宙論

「ティマイオス」においては、さきにのべたように、最初に国家すなわち理想国のことがのべられている。とりもなおさず国土、人間のことである。そこからは、宇宙論、人間論がでてこなければならないわけで「ティマイオス」篇がはじまるのである。

そこで、あらかじめ、次のような表をかかげておくことがよからうと思う。



ここで、神とは能造主すなわち造物主であって、これが宇宙をつくったという。ただしこの造物主については、隠れているものとして、何も語られてはいない。しかし、これがあることによって宇宙が造られたのであるとする。さてこの宇宙をつくるには手本すなわち原型が必要である。しかも、その原型はいわば常住不滅でなくてはならない。ここで、この常住不滅の原型と、無常生滅の所造物との区別があるべきものとされる。この原型はわれわれの理性的思惟によって捉えうるのであり、無常生滅のものは、いわゆる臆見によって捉えるのである。この臆見はプラトン哲学全体にわたって特有のものとしてされている。真の知識（智慧）は神々がもっているものであって、ごく少数の人間のみが、この智慧に与り得る。したがって多くの人間にとっては、一切のものはみな無常生滅するものと見えるのであり、普通の人の智識は臆見にすぎない。しかしながら、生滅の根本には不滅のもの、常住のものがなければならない。この常

住のものは、出来たもの、造られたものではない。生滅するものが、出来たもの、所造物なのである。そのためには、出来たもの（主）と型（形式）がなくてはならない。この創造の形式模範は常住不滅の世界であって、理性によってのみ捉えうるのであるとする。

ところで、全宇宙は常住のものか、初めあり終りあるものか。むろん宇宙は所造物であるからその初めがなくてはならない。しかし一旦出来た以上は不老不死である。不老不死でもその初めは造られたものである。第一、宇宙には形があり、目で見ることができる。もし常住不滅ならば形なく目で見えぬものである。従って、目で見ることのできる全宇宙は、出来たもの、造られたものである。ただし、その所造物中もっとも立派なもので、その他一切の造られたものは皆この宇宙に包含せられている。この宇宙の美は神に近いものである。

それでは、造物主は何故宇宙を造ったか。その造った根本は善である。なぜならば、造物主は善そのものであり、善でない何物もなく、善に満ちたものである。善によって造られたものはまた善ならざるを得ない。宇宙の根本は善である。その善の発現である宇宙は、この上なく善なるもの、美なるものである。宇宙を造るには材料を集めなくてはならない。造り上げた全体と部分とがなくてはならない。しかも宇宙を造るのに、およそあらゆる部分を皆用いてある。用いつくして残るものはない。もし残りがあれば、また他の宇宙が造れるかも知れない。故に宇宙は唯一である。もしこの宇宙以外のものがあれば、それは宇宙以外の四大で、これは宇宙を外部から刺戟することになり、犯すこととなり、そこで宇宙に老病死がおこる筈である。人間に老病死のおこるのは、人間を造る部分の外に多くのものがあるからである。

宇宙の形は球形である。球形はあらゆるものを皆含む。宇宙はあらゆるものを皆含む。球形は中心より全面に対して同一の距離にある。このことが自同ということを表わす。差異ということがない。自同ということがすべての統一の根本となる。球形は全宇宙にふさわしい形で、ただ丸く何もない。人間には目や耳があるが宇宙にはない。全宇宙外には何も残りものはないから、見る目も聞く耳も不用である。呼吸も不用、栄養の道具も不用である。宇宙は自分で分解したもので自分の養分とするので、内外の出入がない。外に頼むことがない。自分の内で皆間に合う。従って、手足は不用であり、宇宙は形として丸いことが最もふさわしい。

また、宇宙は動けるものであるが、その場所で動き、他所へは行かない。すなわち自同の動である。動いても動かぬ。他の方へは動かぬ。自分の軸を廻転するのみである。これは、動いて秩序ありということである。この動いて動かぬ、すなわち秩序ありということは、宇宙に心ありということの一面の解釈になる。なぜなら、秩序があるということは理性的であるということであって、これは心より起るのである。すなわち宇宙には心があるということの一面の理を示している。造物主により造られた宇宙の根本は善であり、万物も元来皆善である。有るとは善いということである。悪とは無いということである。有るとは善いということであって、これは秩序あることである。無いとは悪ということであって、これは秩序の欠けていることである。この善を眺めるという立場からいうと美ということになるのである。宇宙は単に形態のみのものではない。善美にして、秩序あり心あり、体と心との結合したものなのである。

さらに、宇宙の体は四大から成る。地、水、火、風である。宇宙の体はこの四つの結合によりできている。結合（四大の結合、心身の結合）は調和ということばであらわす。この調和は数であらわし、この四大は適当な数の比で結合し、これを和合という。一度和合した以上は分解しない。人間の体は和合が精密でないから分解する。宇宙の和合は完全で、分解することなく永久に存続する。その比というのは、火の空気におけるは空気の水におけるが如く、また水の地におけるが如く、このような比例で和合する。プラトンは和合について一面友愛の語を用いている。友愛とは精神的であるが、上記の数理的和合は、友愛を数で象徴的に言っているとも見られよう。ほんとうの和合はこの精神的友愛であり、友愛の情で万物が結合する。数の和合は一種の象徴にすぎないかも知れない。

宇宙の運動は完全である。自軸による同一空間を廻る自転の外に宇宙の運動はない。上、下、左、右、前、後など六種の運動はこれに近づくことができない。自同ということは宇宙の大事な原理の一つである。この自同ということがすべての存在の根本であり、「自らに足りて他に俟つなし」ということである。また人間の境涯にあてはめてみると、「終日歩みて一步も歩まず」ということになる。目を開いて他を見れば何料歩んだということになるが、心をもっぱらにして目を閉じて、歩むことに一心不乱になれば、ただ動くのみ、足を上下させるのみである。それゆえ、自軸自転はこれ完全なる運動であって、精神上の真理を自軸自転ということによって宇宙が象徴しているとみるのである。

つぎに、宇宙の心であるが、この宇宙を造った神は、宇宙を自足のものとして造ってその中心に心をおく。宇宙の心は宇宙の中心より全体にあまねく満ち、そのみならず外からも宇宙の体を包んでいる。宇宙の内に心があるというより、心の中に宇宙がある。それゆえ、宇宙は自分自身と交通する。宇宙には対外の関係はないから交通といえば、自分自身と交通するのであり、知るとは自分自身を知るのである。人間の境涯でいうと、人間が万物を知るほど自己を知ることになる。山を知る、音を聞く、色を見る、皆これ自分を知ることである。自分以外は知ることはない。宇宙の心はまさしくその通りになっている。

心の構造はどうなっているか。これまでのところでは、宇宙の体を先につくって、次に心を与えたようになっているが、むしろ事實は逆で、心が先である。その心の構造は、「自同」と「他」と「心的実体」とである。「自同」とは、自ら自分に同じく、分解できぬことを指す、常に一なるものを指す。分けることができれば分かれるが故に「他」ができる。「他」とは形体的のものであって、分けることができる。「他」と「分けること」とは同じ意味合いがある。「他」は分かつことができるから結合に障害をきたすものである。この「自同」と「他」との結合、かかるものをプラトンは「心的実体」（實在のこと）という。この三つのものが一つに合して心はできている。推しつめてみると「自同」と「他」とに帰するのを、プラトンは三つありという。これはどのように解されようか。

これは、意識の構造ということにつながるであろう。すなわち「自同」とは主観を指し、「他」とは客観を指し、「心的実体」とは、主客合一を指しているという考え方である。この

三つで心はできている。それでは心的実体のみでよいのではないか。なぜ、そこに三者が必要であるのか。他に例をとると、支那の陰陽説においては、陰と陽との外に沖が必要とされている。すなわち、沖に媒介せられて陰陽は合すという。この場合、心的実体は沖に相当する。心的実体は媒介として入用である。心的実体がなければ、「自同」と「他」とは合体できない。「自同」だけ、又は「他」だけでは實在を成さない。具体的となるには、主観、客観が合一せねばならない。しかも、その合一であるに拘わらず、「自同」（主観）「他」（客観）の趣がはっきりとある。すなわち、意識が明白であるためには、主客合一しながら主客の働きが分明でなければならない。

- ……………自同……………主観……………（自同は分ち得ぬ）
- 多……………他……………客観……………（他のものと対立あり）
- 即多……………心的実体……………主客合一……………（實在）

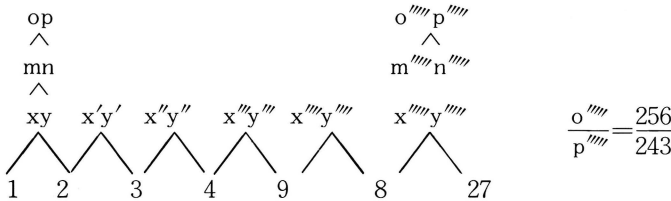
さて、「自同」「他」「心的実体」この三つを合して、この三つを活動とも言わず、物とも言わず、ただ「自同」「他」「心的実体」の三つである。この三つを一つの魂とする。この一塊を又細かく分ける。その分けるについてはその塊の一部分をとり、次にその二倍、三倍、四倍、九倍、八倍、二十七倍ととっていく。

$$3 \quad 9 \quad 27 \dots\dots (3 \text{倍})$$

1

$$2 \quad 4 \quad 8 \dots\dots (2 \text{倍})$$


また、その1, 2, 3の各々の間に、ある比例を以て、xy, mn, op等をとる。




この $\frac{256}{243}$ の時、全体をとれば、もとの全体となる。このように沢山の部分に分け、分けたものを又一つにする。しかし、一つにしても分けたことは消えない。これは、人間の心の働きが無数、無量であることを示しているものと見てよかろう。心の働きは分かれて働きたまた統一する。統一あれば分かれることがある。分かれ合し、合して又分かれる。ここで数のことについてはどれだけの意味があるのかははっきりしない。「数」に遊ぶというおもむきがうかがわれよう。

また、先の三つを一つにし、又これを多くに分けて又一つにする。その一つにしたものを縦に二つに分ける。すなわち $\bigcirc\bigcirc$ となる。しかし実際は横になる。すなわち $\begin{matrix} \text{外} \\ \bigcirc \\ \text{内} \end{matrix}$ の如くである。これは、各々が一元であって、この二つの円がその場において各々廻転する。これが運動のもっとも完全なものである。これは意識の性質を象徴したものであろう。すなわち、前提結論がもとに戻ると言おうか、すべて知るとは皆循環であるということであろう。プラトンはすべて認識は記憶であり思い起こすのであるという。認識とは本来の認識を再び知るのである。

識は自識であり、自識はもとに戻るなのであるとする。自分の家だなど思いあたるのである。赤と知るのは、もと赤が自分の中にあるからである。赤が中になければ赤と識るはずがない。赤と再識するのは、一時忘れていたのを思い起こすのであるという。故に、本来真理は皆自分の心に具わっているものであるという。識るとはこの本具のものを呼び出すのであると言うのである。すなわち、自分が自分と交通するのである。「あの花は赤い」と言うも、これは実は自分のことであり、自分が自分を知ることである。心の働きは円の廻転であり、本に戻るのである。自分の場所で廻転するのである。

 内、「他」の動…七つに分かれる。1 $\frac{3}{2}$ $\frac{9}{4}$ $\frac{27}{8}$ (この比例をくり返す)
外、「自同」の動…分かれぬ (ただ七つのみに分かれる)

七つの中、速度は三つは同じく残り四つは比例的に異なる速度で運動する。この七つの運動の外圏がまた運動する。この運動は、心の構造を示し、心を運動であらわしている。すなわち、自同の動と他の動とであり、七つに分けるのは行星にかたどったもの、日、月、木、火、土、金、水これである。心の動きは無数、無量であり、これを一つにして又これを二つに分ける。

 内、「他」の動…公転の方、黄道の方、七つをこれに配する
外、「自同」の動…地球の自転、赤道の方、全天の運動

これで見ると、太陽系の組織で宇宙の心を象徴している。天体の現象を心であらわしている。しかし、プラトンからすれば、心が形にあらわれたものが天体の運行であるということであろう。宇宙の自転すなわち自同の動は意識の主観をあらわし、公転の方は他の動をあらわす。何れも廻転であり、識をあらわす。七つの運動もこれみな廻転であって、自同の動は統一の側に立っている。このように天体の運行でもって宇宙の心を象徴していると見られる。プラトンによれば、普通に言うところの運動とは影にすぎず、真に動けるものは心であり、それ以外にはない。物質の空間における運動は心の運動の写しであるというのである。

次いで、宇宙の体と心の結合はどうであろうか。宇宙の心は中心から各方面にひろがり満ちて、あらゆる部分を隈なく連合し、その心は常に廻転をつづけ、不生、不滅、理性的な生活を永遠に続けることをはじめたものである。宇宙はおおよそ考え得る永遠なるものの中もつともよきもの、すなわち原型の世界を手本として出来たものの中もつともよきものである。しかし、心は自同と他と心的実体（すなわち實在）の三つの和合によって出来ており、またその三つに相応して分けられ、結合せられ、又分けられ、自分を巡って転ずる。分—合一—分—合、それが自分を巡るのである。分けられた何れの部分にも、又全体にも心がふれる。心のふれるところのものについては何と同じか、又何と異なるか、何のために、どこでどのように何時できたかなどについてことごとく知らすことができる。このように心はあらゆる事物を知るのである。この知るということの大別すると

① 感性的に知覚し得るものに関係するものとしては、これは宇宙の心の「他」の動に関係するものであって、「他」の廻転が何の妨げもなく、その固有の秩序により全身に知らせられるときは、確実にして真なる臆見が成立する。この臆見は理性的思惟ではないが、確実にして

真なるものである。

② 宇宙の心の「自同」の廻転によって得るもので、これが全身に通達するとき、理性的知見ならびに学問が成立する。

プラトンでは、一つは「自同」の動によるもの、他は「他」の動によるものとの、二種の知識が考えられ、人間の心についても同様に語られているようである。

さてここで、原型、模範、すなわち永遠なる生きものに尚一層似せるために、この宇宙という永遠にして動かぬものをば、動いた有様で構造しようには、どのように模倣するかということがある。それは、数の一定の比例に従って進むことによって、永遠の統一体という不動常住のものを現わすことにあるという。この一定の比例に従って進むとは時間のことである。昼夜、年月はそのために出来たものである。従って宇宙の成立と時の成立とは同時である。宇宙以前の不滅の生きもの、すなわちイデアの世界に時間はない。宇宙以前とは時間上でいう時間ではない。イデア界に時間をあてはめてはならぬ。宇宙にとっては、有った、有る、有るであろう、という過去、現在、未来は時間の形式であるが、これを不滅の實在にあてはめてはならない。イデアは、ただ有る、というだけである。過去、現在、未来の区別のない有るである。時間なき有るである。動にしてはじめて「有った」「あるであろう」ということが出来てくる。真の實在には前後、老少はないのである。このように、出来た宇宙において、数に従って廻転する「時」は、時を超越した永遠の世界を真似るのである。すなわち、永遠ということの時を模倣する。宇宙の運動は無窮の時である。原型には無窮の時とか、いつまでもということはない。それ故、時と宇宙の成立は同時であり、宇宙がこわれれば時も消えるのである。

さて、この時というものの成立のために、日と月と五つの星をつくる。この七星は夫々七つの大きな円を描いて廻転する。これは「他」の廻転である。そこで「時」は「他」に属するということになる。この七星の廻転は夫々に遅速がある。何れも自同の運轉（すなわち全天の運轉）と斜角をなす所の平面上にある。この七つの円は「他」の動をとりながら「自同」の動にて統一せられる。そこで七星の運轉はこの二つの作用をうけて螺旋形となる。

七星の中、日はすべての星の行動を照らすために作られたもので、これが全世界を明らかにする燈火である。ここに全天の運轉と日によって昼夜の交代ということがおこる。この昼夜の交代が自同の運轉にもっとも相応する。地球は全天の軸を中心として廻転するものであるから昼夜の交代は又地球の自転によるとも言い得る。月という星が一廻りで一月となり、日という星が一廻りで一年となる。

ついで恒星であるが、はじめ原型を模造せる宇宙においてなお足らぬものが四つあるとし、その中の神々がこれにあたる。この神々である恒星は天の種子に属するものであって七星よりも完全であるとする。宇宙は四大で造られているが、恒星は全部火で造られ、いたって美しいものであり、球形にして全宇宙と同じ型で天一杯に配属しているという。このものの運動には二種ありとして

① 各星は自軸自転、自同の運動をなすことである。これは「同一のものについて常に同一

のことを考える」ということである。このことは意味ふかく、自識をあらわしている。識の本來は自識である。プラトンは自覚が根本で、この自覚の中に、感覚も、直覚も、思想も、記憶も判断も、また道徳もあるとする。みな自覚の変形にすぎぬという考えである。日常の生活について見ても、自分に具わること発揮するのであり、「自同」の動である。もちろん「他」による内容の発展があることはある。

② 各星は全天の自同の支配の本に立つことである。

このように、行星とは相異があり、恒星には「他」の動はない。すなわち行星は「他」の動であって同時に全天の自同の支配の本に立つのであるから、恒星は行星よりも完全で美しいものであるわけである。

最後に地球であるが、造られた順序から言えば宇宙の中で最初に造られ、これは全天をつらぬく軸を中心として昼夜の別をつくっている。

これまでの宇宙、行星、恒星皆神々であって、「神」の直接造られたものであるが、これから述べるところは、更に神々が造ったものであり、本の「神」すなわち「造物主」から見れば間接に造ったものである。その中で人間は、造物主の間接創造にかかわるものの中で最もよいものであるとする。プラトンによれば、神々には、誰にもその姿を見ることの出来る神々、すなわち星の運行で見る神々と、姿を見せようと思うもののみでその姿を見せる神々、すなわち心眼にて見得る神々とがあることになる。造物主は、その生みの子である神々に次のことを言う。すなわち

「吾が神々よ、我れは造物主にして汝等の父なり」と。

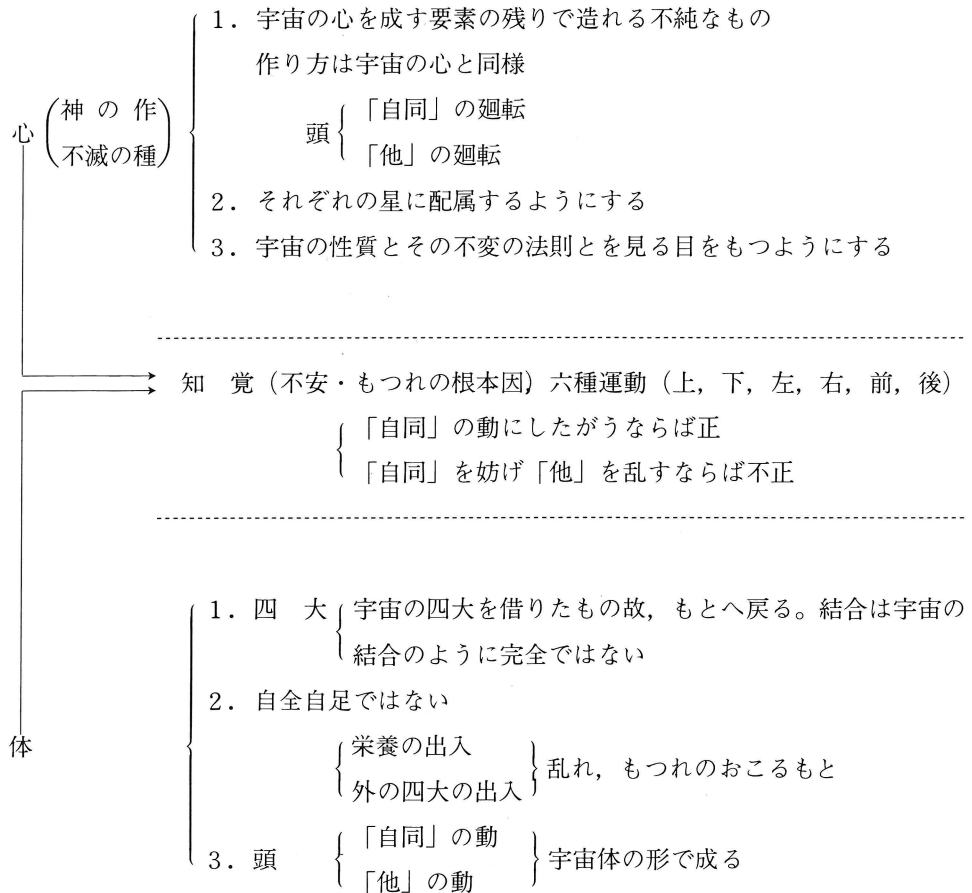
この我れは造物主なりとは構造者、建築者ということであり、又一面、汝等の父であるということは大切なことである。神を建築者とすれば機械観となり、ライブニッツのように王すなわち君主ともすれば倫理の根本となり、又父と見れば宗教の対象となる。これは、善を目的とする目的観のもとに機械観が付くと見る考え方にも通じ、このような考え方がプラトンにあったとも言えよう。物質の世界を造るには物質の法則があり、宇宙も四大で出来ているのであるから、この点から一面機械的などころがある。また宇宙の建築者にして同時に父なりと言えば精神的などころがある。従ってこの考えの中には、目的原因と機械原因との両面が具わっていることになるであろう。更につづいて言う。

「さて造られたものは解けるのが当然である。しかして宇宙は我れの無限の力によって不滅となっている。汝等は不老不死である。然るに三種の生きものがなお造られていない。よって汝等を造ったその造り方にならって、この三種のものを造れ、そのためには不滅の部分がなければならぬ。この不滅の部分とは、天あるいは神的なものであり、不滅者に等しいものであって、正義と汝等に従うものである。今この種子だけを汝等に与える。よってこの不滅の種子の上に消滅すべきものを混合して生きものを造れ」と。

そこで能造の主である神は、神々に種子を与える。これは不滅の部分となるものである。すなわち、はじめ宇宙を造りたる時の心と同じ混合物の残りを取り、同じように混合する。但しこ

これは宇宙心のように純粋ではなく、第二位第三位のものである。この混合物を星の数に合せて分け、各恒星に与える。すなわち各星におおのの心を配当する。そこで、一人ごとに恒星における一つの住家があり、やがてそこへ帰ようになるのである。恒星は各々の心に宇宙の性質やその不変の法則を見る目を開かせるのであって、しかも生けるものの中でもっとも神を畏敬するもの、これが人間の心の種子なのであるとする。

ここで、神々の造ったもの（間接的な所造、模造の模造）をまとめると次のようになる。



これで見ると、人間の心もやはり廻転である。すなわち「自同」の動と「他」の動とである。この心が頭に宿るとするのである。神の作である心に二種あって、強い方が男で弱い方が女であるとする。この心は必然の力で頭に宿らせられるのである。また宇宙の体は四大を余さないで造られたのであるが、人の体にはたえず四大の出入があるから、その、他からの刺戟によってどの心にも知覚がおこる。体は宇宙からの借りものである。知覚は神からうけた心と、神々の造れる体との交渉からおこってくる。心がよく支配すれば正義となり、知覚に支配されれば不正となる。正義を行い、心に与えられた時間を生きた後は、その星に戻って幸福に生活するし、もし正義にはずれる時には第二の人間である女に生れ、さらにまた悪事を行うと、その悪の種類によって畜類に生れるという。この苦しい生活の中で、次第に自己の自同の廻転にした

がうようになれば、種々の迷路を理性的知覚によって逃がれ出て再び高尚な性質にかえる。即ち各々星に帰っていくのである。それまでは輪廻して苦悩の生活をなすのであるという。このように知覚は体と心との結合によって生じ、その知覚は一切の乱れ、もつれの根本であるとされる。これが心の「自同」の動を妨害し、また「他」の動をも妨害する。「他」も秩序ある動ならばよいけれど、それが混乱すれば心の固有の運動をかきみだすことになる。ただ併し心の固有の運動を完全にこわすことはできない。神による「自同」，「他」であるからである。従って混乱が止めばもとに立ちかえる。従って外部のものに対して「自同」と「他」とのこの関係を誤らぬことが大切である。すなわち「自同」と「他」とが固有の運動にかへればよろしいのである。

さて、「自同」の廻転と「他」の廻転とを又神的廻転とも言い、精神の根本をなしている。これは宇宙の形に擬して球形につくられた頭に付与されていることは前述のとおりである。すなわち頭に心が宿っている。頭は身体の全部を支配するのであり、身体他の部分は頭に仕へるためのものである。頭が種々の器官を通してあらゆる身体の運動を支配する。地面の高低に応じて動けるように胴を伸ばして作り、それから手足を出して作ってある。手は支へ足は歩むためである。身体は前面と背面と分かれ、前面は優位をもち、その方に燈火すなわち眼をつけてある。眼は体内から、その体内の火の中でも特に日光に似た部分を放射させる。しかもその眼の殊に中央部は粗雑な火（光）の出ないよう又はいらぬように遮断し、ただ精微なる火のみが出入するように構造されている。このようにして、内から出る光が日の光と出合う、その出合うところが物体である。その出合ったところに一種の物体が出来る。この一種の物体が山ならば山、川ならば川とすべて物の運動を人間に伝える。そして身体内にまで入ってくる。精微な火が物体運動を伝える役目をする。そして心のところまで伝えてくる。心にとどいて視覚が出来る。もし身体内から火が発してもそれと同類の火が外界にないときは、たとえば夜などはその火は消えてしまう。このような場合身体の内部の運動は緩和され、やがて休止して眠りをさそう。内部の運動が全く止まないときは夢を見ることがあるとする。

プラトンは原因について二重原因を考えていたとみられる。

① 神的原因

理性的思惟の対象	自然の理性的秩序の本
善美（人間を幸福にするもの）	

② 必然的原因

補助原因	
運動が他から次々に伝わるもの	現象生起の因
計画なきもの	善美から見れば偶然なもの（善美実現の道具として必然的原因を用いる）

補助原因は神の万物および人間を造った目的を実現するための道具である。真の原因すなわち神的原因は人間の理性的思惟ではじめて知り得るものである。この真の原因があって理性的秩

序が現われる。このように理性的思惟は万物の真の原因を見るもの、又は真の理性的秩序を探究するものである。他方、必然的原因は種々の運動が伝わってきて又それを次から次へと伝える。これが補助原因である。補助原因の方から言えば、その運動のはじめは分らなくてもよくただ次々へと伝えるのである。もちろんその運動のはじめとは神的原因なのである。すなわち自ら運動を起すのでなく、起ったものは必然的に次から次へと伝わらねばならないのである。これは必然的にして故意のものではない。第一の神的原因は善美の実現をはかる目的をもつものであり、第二の補助原因すなわち必然的原因はただ現象を伝えるのみで、理性知見の対象でない。計画のない偶然とも言えよう。偶然とは善美の実現に対しては目的なく偶然であるということである。但しその働く形式は必然である。これは二重原因であり、一方はもう一方の上に位しているというべきである。

万物を見るためには必然的に補助原因を用いるのであるが、何のため眼があつて見るのかといへば、その最大なることは日月星辰を見、天の構造を見、昼夜四時の循環を見、数の比例にて時を知ることである。行星は時を知するための道具と見るのである。この眼で見ることによって宇宙の原因を窮めることは理性的思惟にかなうことであり、神は人に眼を授けて天の運行を見せしめ、人に対し思惟の世界の運行が如何にあるべきかを示しているのである。すなわち心の運行と星の運行とは相応しており、人の心は宇宙の心に型どられ、天地の運行が人の心の運行の模範であるとするのである。天地の運行は乱れないが人間の心は乱れやすい。人は天の運行を見てその心を整えなければならない。これは眼があつてこそ出来ることである。天行の理の根本はイデアにあるが、人はさしあたりは天行を手本としてその心を正しくするのである。それ故、眼は機械的構造、機械的運動であるが、何のためにあるのかと言えば人の心を正しくし善美の境に導くためにあるとするのである。これすなわち目的原因が機械原因を従属せしめることである。

つづいて目の外に、聴、嗅、味、触など五感についてのべられるが、もっとも大切なのは目、耳である。耳について、その聴くことの機械因の方は風で説明するが、目的因の方で言えば第一は言語交通であるとする。プラトンは言語を大切にす。理性的思惟は問答により、問答は言語による。問答は思想の発展である。独りで思惟するのも自問自答であつて、心中にて問を發し自ら答えるのである。これは思惟作用であつて言語無しでは思惟はできない。つまりところ思想、言語、哲学は同じことである。これは耳によってこそ出来ることである。なお、音楽をきくことは大切であるとする。すなわち心は運動であつて、「自同」と「他」とが互に宜しきを得ればこれ心の調和であつて、これが真の運動であるとする。音楽につれて心を調和に導くというところにプラトンの趣意がうかがわれる。心を静かにするとは心が秩序的に動くことであつて、動かぬ静はない。動くことに調和あることが静である。このことは音楽すなわち耳があることによって出来ることである。

お わ り に

これまでのところは、少しのずれはあるにしても、ほかは「理性」を通じて生成されたものについて語られてきたのである。しかしそれに併せて「必然」を通じて生成されるものについても語られなくてはならないのである。なぜならば、この宇宙の生成は「必然」と「理性」との結合から、それら両要素の混成体として生成されたものであるからである。この際にはしかし、「理性」の方が「必然」を説得して、生成するものの大部分を最善へ導くようにさせたということで、「必然」を指導する役割を演じたのであり、このようにして「必然」が「理性」の思慮ある説得に伏することによって、まずここに万物は構成されたというわけなのである。従って、もしも万物が、いまのべたような仕方でも生成してきた模様を、ありのままに語ろうとするならば、プラトンの言う「彷徨える原因」にもふれて、それが元来どのようなようにして運動を惹き起こすようになっているのかについても語られねばならない。それらのことがらについては、別の機会にゆずることとしたい。

ところでこの対話篇の偶々を通じて、その根を成すものは、あらゆる有機体の存在の目的をば「魂に対する世話」にありとし、人間の魂と宇宙の魂との間の調和を見ることにあったのである。人間と宇宙、文化と自然との間には対立というよりはむしろ美しい調和があるというのがプラトンの確信であった。従って、望ましい国家における秩序は宇宙を支配する秩序であり、同時にまた人間の魂の内なる秩序でなくてはならないとするのである。それ故人類の歴史は、人間が自然を征服した過程ではなくして、宇宙そのものの歴史の一部なのであった。人間教養の一般的原理をプラトンはそこに見出していると言えよう。また彼によれば、人間の魂の不死なる部分すなわち理性は頭のなかにあるが故に、人間はあたかも天に根を張っている樹木にたとえられている。従ってわれわれが善に至る道は正しくこの根を培うことでなければならないとする。すでに述べたように、人間の頭の中にも天の軌道の運動と同類の運動が行われているのである。それ故、人が宇宙の調和と廻転とを学ぶことができれば、これによって、自己の内なる軌道の運行を正しくし、現在および将来にわたって神が人間の最善の生活として示した生活をなすことができることになるのである。しかも、このような生活をなすことは人間の原初の本性に従うことであると言うのである。ここに、人間の現実の墮落に対する痛切なる憂いがこめられていると思われる。人間の魂が肉体をもつ以前には性の区別すらなかったが、肉体をもって後は、感性的欲求を克服することが出来なかった魂が先ず婦人に墮落し、さらに墮落して動物になったとする。あらゆる動物は理性を失い無知となることによって、姿をかえ、本来の人間の原型から遠ざかり、次第に下等なる動物へと墮落していくとする。このように見えてくると、プラトンからすれば、進化ということとは正しく倫理的進化に外ならず、それは人間の原初の本性に回帰することであった。道徳的法則は、人間の世界のみを支配する法則に止まらず、同時にまた全宇宙を支配する法則であるのである。宇宙論が、プラトンによって倫理的基礎を与えられたとも言うことが出来るであろう。

さらに思うのに、このティマイオスの一篇は、宇宙の構造を説き、人間の構造を説き、しかも心の働きは全宇宙の運行をもって手本とするのであり、これによりわが心を正しくしようがためのものである。観察せられるもの（宇宙）に観察するもの（人）がならう。東洋の「天何をか言わんや四時行われ万物育す」であって、まことに教訓的であると言ってよい。アリストテレスはその倫理学で、知的徳と行的徳とを分け、前者に優位を与えている。即ち後者は蓋然的と見てのことである。プラトンは知行合一、知徳一体であり、その師ソクラテスの「知行寸隙なし」をうけついたのである。彼は常に真理を説くが、善も美も説く。しかもこれらは一体である。その中の根本はと言えば、善が真と美を生むのである。真を愛し智を愛し、知るとは真を知るのである。アリストテレスにおいては意志の論もでて、知っていても出来ぬという論にもなる。プラトンにおいては、およそ真を愛し知を愛するこれ皆実行を離れぬとし、身を修めるより外の目的はないとするのである。プラトンの立言は二元的であるが、しかし物質と心は循環ということで統一出来るとし、身は身、心は心、心身の対立、善悪の対立があろうとも、この悪を除く、つまり心を正して身を修めるということ、ただ学問のための学問に墮するのではないということに眼目があると思われる。この一篇の目標もまたそこにあるといえるであろう。

参 考 文 献

- 1) プラトン、種山恭子訳；ティマイオス、プラトン全集12、岩波書店、1975
- 2) ジョン・バーネット、出隆・宮崎幸三訳；プラトン哲学、岩波書店、1958
- 3) 長沢信壽；プラトン、弘文堂書房、1936
- 4) クレメント・ウェップ、瀬沼 茂訳；西洋哲学史、社会思想社刊、1969
- 5) 山本光雄訳編；初期ギリシャ哲学者断片集、岩波書店、1973
- 6) プラトン、久保勉・阿部次郎訳；ソクラテスの弁明・クリトン、岩波書店、1932
- 7) クセノフォン、佐々木理訳；ソクラテスの思い出、岩波書店、1932
- 8) プラトン、菊地慧一郎訳；プロタゴラス、岩波書店、1927
- 9) プラトン、久保勉；饗宴、岩波書店、1958
- 10) 西晋一郎；ティマイオス講義ノート断片、信州夏期大学講座、1926
- 11) アリストテレス、高田三郎訳；ニコマコス倫理学、河出書房、1938
- 12) プラトン、山本光雄訳；国家、世界の大思想1、河出書房、1965
- 13) パートランド・ラッセル、東宮隆訳；西洋の知恵（図説哲学思想史）上、社会思想社、1968
- 14) Platon; Apologie des Sokrates und Kriton,
Übersetzt und Erläutert von Otto Apelt,
Der Philosophischen Bibliothek Band 180 Leipzig, 1923/Verlag von Felix Meiner
- 15) Platon; Phaidon-oder Über die Unsterblichkeit der Seele
Übersetzt und Erläutert von Otto Apelt,
Der Philosophischen Bibliothek Band 147 Leipzig 1923/Verlag von Felix Meiner